

北海道新聞

平岸の歴史を訪ねて

自然史編

第6回、母なる豊平川と二つの扇状地④

中の島は、明治時代は「中河原」、大正時代は「中島」と呼ばれ、昭和初期から現在の呼称になりました。読んで字のごとく、もともとは豊平川に囲まれた中州でした。この地域の変遷を昔の地図を参考に追ってみましょう(図1)。

明治43年の地図では、中の島が周囲から完全に切り離された中州になっていることがわかります。豊平川は真駒内を過ぎるといくつかの川筋に分かれ、このうちの二本の分流が今のミューン大橋のあたりから現在精進川が流れているルートへ流れ込んでいます。この二本の分流は、今の北海道尚志学園校のやや南のあたりで一本に合流しています。この分流は、歩いて渡るのが困難なほど水量も多く、流れが速かったそうです(平岸百拾年編集委員会、1981)。

平岸と中の島は崖で挟まれていたこともあり、昭和初期まで交通が完全に遮断されていました。また、豊平川に囲まれたこの地域は精進川も合流する場所であることから、何度も洪水の被害に見舞われています。『豊平町史』によると、明治23年9月に水害があり、「平岸村字中島へ精進川橋梁流失ノタメ目下不通」となり、実地調査による報告では「中島は島中満水し、居宅浸水十一戸(島中全戸)、西方のやや小高き芋田長之助所有の家屋に男女五十余人避難してその難を免れたが、作物に多くの損害があった」と記されています。

大正7年の地図を見ると、二本の分流のうち北側の分流が消え、旧河道の記号になっていますが、洪水による流路の変更なのか人工的なものか

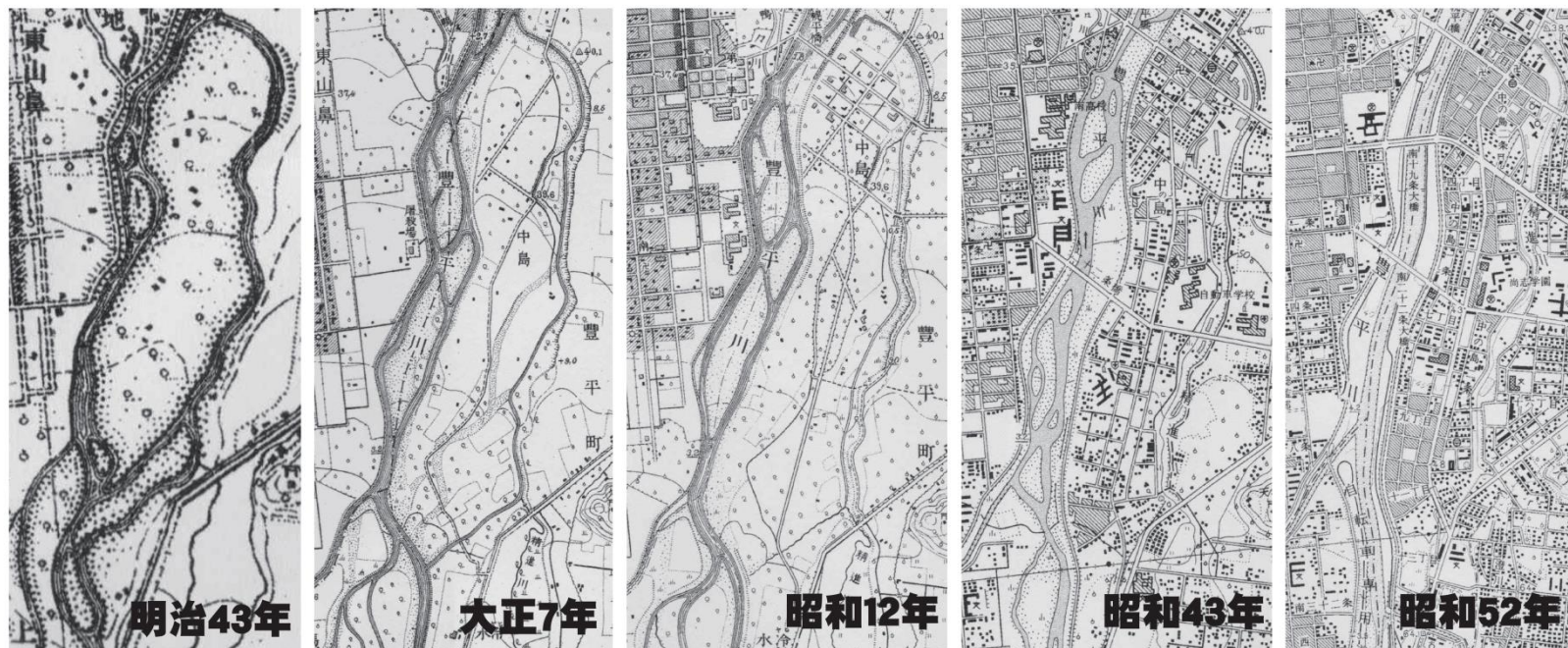


図1. 中の島付近の豊平川と精進川の移り変わり。

はわかりません。昭和12年の地図では、精進川に流れ込む豊平川の分流が著しく減少しています。これは、昭和5年に豊平橋から今のミンヘン大橋のあたりまでの堤防が完成したため、これ以降は取水口からわずかな水量のみが流れ込むようになりました。この堤防の完成により中の島は以前のように頻繁に洪水に襲われる恐れはなくなりました。

昭和43年の地図では、このわずかな分流も消えています。この時期の中の島は宅地化が進み、農地もほとんど無くなっており、そのため必要のなくなった取水口が閉じられたかと思われる。川の跡は現在、道路と駐車場となっていますが、精進川の手前の公園に卡ろうじて河道の痕跡がみとめられます(写真1)。

昭和52年の地図では豊平川の中州が消え、川筋も一本に統合されているのがわかりますが、これは浚渫と護岸工事により豊平川が「排水路」と改造されたためです。水質悪化の影響もあり、豊平川から消えた鮭を呼び戻そうとする「カムバックサーモン」運動が行われたのもこの頃でした。また、精進川は洪水防止のため、ミンヘン大橋のやや上流のあたりで豊平川にそそぐ放水路が新たに作られ、もとの精進川も護岸工事により、コンクリート三面張りとなり、生活排水などで水質の悪化が進みました。その後、自然保護活動が盛り上がった2002年に北海道では2番目の多自然型川づくりのモデルとなり、コンクリート護岸が外され、河畔林が整備され、現在の姿になっています。

参考資料 平岸百拾年編集委員会(1981)、『平岸百拾年』、平岸百拾年編集委員会。
豊平町史編さん委員会(1958)、『豊平町史』、豊平町史編さん委員会。

バックナンバーお届けいたします。バックナンバー保管してありますので、ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

「編集後記」 ～新聞Ⅱ料理論～

常々、新聞と料理は似ていると感じます。様々な食材の中から、旬の食材を吟味し、お客様が食べやすいように味付けして提供する。新聞も同じです。古いニュースはだれも見向きもしないし、最近では池上彰さんのように誰にでもわかりやすい(食べやすい)ものが好まれています。甘党(左翼)・辛党(右翼)のように人によって味付けの好みが異なるところも同じ。近年は地産地消という言葉がもてはやされていますが、情報の地産地消は北海道新聞がもっとも得意とするところ。今後も地元の食材を活かした料理(ニュース)を提供していきます。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年室蘭市生まれ。金沢大学理学部地球学科博士課程(古生物学専攻)を修了後、六花亭に入社。2011年より現職。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

TEL: 0120-1128-348

Fax: 0120-1128-358

◆この連載は毎月1日・15日の道新朝刊に折り込みいたします



写真1. 豊平川旧河道跡(中の島2条10丁目付近)